



この丘には歴史と発見がある。

目白学園遺跡



縄文時代中期前半の土器分布



縄文時代中期後半の土器分布

縄文時代の落合遺跡

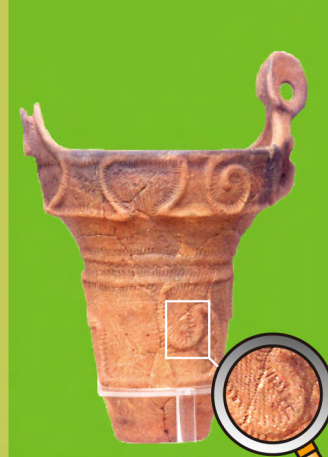
妙正寺川流域には今から約3万年前以降の後期旧石器時代から人類の痕跡が発見されています。そして、最も古い段階の縄文土器—今から約1万2千年前の縄文時代草創期の隆起線文系土器—が、JR 山手線新大久保駅付近の新宿区・百人町三丁目西遺跡から発掘されています。

目白学園遺跡では、縄文時代早期や前期の土器もみつっていますが、中心となるのは縄文時代も半ばの中期の頃です。中期中葉から後葉の500年ほどの間には、神田川流域を中心とする武蔵野台地の東側ではおそらく最大の「環状集落」がこの地にあったようです。この時期の住居跡を数えると、台地上の平らな場所を中心に直径130メートルほどの範囲に90軒をこえます。おそらく、地面の下にはみつからない住居跡もあることでしょう。また、台地北西の斜面では、台地上の集落から斜面に向かって捨てられた土器や石器などもたくさんみつっています。

現在は残っていませんが、目白学園内に住居跡を復元していたこともあります。



勝坂式土器
曾利式土器



阿玉台式土器
加曾利E式土器



縄文時代中期の土器

落合遺跡でたくさんみつっている中期の土器も、形や文様からさらにいくつかのグループに分けることができます。

「勝坂式土器」と「阿玉台式土器」は、中期中葉の土器です。「勝坂式土器」は信州から山梨という関東西部を中心にみつっている、神奈川県相模原市の勝坂遺跡を標識とする土器のグループです。対して「阿玉台式土器」は、千葉・茨城などの利根川流域の関東東部を中心にその分布範囲が広がっています。

「曾利式土器」と「加曾利E式土器」は中期の後葉の土器です。「加曾利E式土器」は関東全域に、「曾利式土器」は中部高地を中心に広がる土器です。本遺跡では「加曾利E式土器」が主体で、「曾利式土器」が少しみつっています。

縄文人は土器作りのときに、自分たちのグループの決まりごとを強くもっていますので、こうしたグループの存在は他地域との交流を考える手がかりとなります。

さらに、同じ「加曾利E式土器」でもいくつかの段階に分けられ、たくさんに見える住居の跡でも同時期にあったものは5軒程度であったことが推測できます。一見少ないようですが、それが積み重なってたくさんの住居跡がみつかることは、この台地が縄文人にとって住みやすい環境であったことを物語ります。

縄文時代の住居と炉

住居跡は地面を掘り下げて作った堅穴住居で、上から見ると、円形のものや隅の丸い四角形のもの2種類があります。この中に数本の柱穴を掘って柱を立てるのですが、柱の配列や数には違いがあります。また、壁際に溝をめぐるもの、それがないものなどいろいろあるようです。それから、住居の中には炉が作られますが、石で囲んだもの、土器の上半分だけを利用して埋めたもの、土器を埋めてさらに石で囲んだものなど様々です。このような違いは、時期によって生じたのか、違う集団がいたために生じたのか、それとも住居の使われ方の違いなのか、これからまだまだ考えなくてはなりません。

発掘すると、重なり合ってみつかる住居跡は1軒が埋まった後で、別の住居が作られたことがわかります。また、同じ住居を拡張した跡などもみつっています。

縄文時代

スタンプ

目白学園構内と資料室

目白学園構内の正門を入って右手にある佐藤重遠記念館の1階に出土品資料室があります。

ここには、目白学園遺跡（落合遺跡）から発見された多くの貴重な文化財のうち、土器や石器など約50点の資料を展示しています。これらの資料を縄文時代・弥生時代・奈良時代3つの時代ごとのコーナーに分け、写真や文字パネル、年表などとともに紹介しています。

縄文時代の資料として深鉢形土器などの縄文土器および打製石斧・磨製石斧・石匙・磨石を、弥生時代の資料として壺形土器・台付甕形土器・高坏形土器などの弥生土器をみることができます。また、奈良時代のコーナーでは、土師器や須恵器などのほか、堅穴住居のカマドの復元模型があり、当時のくらしを知ることができます。出土品資料室の脇には収蔵庫があり、これまでの調査で発見された各時代の遺物が、貴重な学術的資料として大切に収蔵されています。



交通案内

西武新宿線または大江戸線「中井駅」から徒歩 8分
東西線「落合駅」から徒歩12分
大江戸線「落合南長崎駅」から徒歩10分
西武池袋線「東長崎駅」から徒歩18分



学校法人目白学園

新宿区中落合4-31-1 TEL 03-5996-3115
開館日時 月曜日～金曜日 午前10時～午後4時
休館期間 学園の夏期・冬期休暇期間、入学試験期間及び学校行事時
入館料 無料
※車でのご来館はご遠慮ください。

新宿ミニ博物館・目白学園遺跡

内容についてのお問合せ先 公益財団法人 新宿未来創造財団 新宿区立新宿歴史博物館
TEL 03-3359-2131



弥生人のくらしと道具

落合遺跡でみつがっているのは主に弥生時代後期の土器ですが、これらも様々な形があり、色や装飾があります。縄文土器と比べて器の形の種類が増えています。写真は左から、貯蔵用の壺（壺形土器）、供献用の高坏（高坏形土器）、煮沸用の甕（甕形土器）です。直接火にかけて使う甕には装飾はされません。これに対して、火にかけることのない壺や高坏には、赤色が塗られたり、粘土を貼り付けたりして装飾されています。器の果たす役割の違いが形や装飾の違いに現れています。

弥生時代の住居と炉

落合に住んだ弥生人のすまいは、地面を掘り込んだ堅穴住居で、上からみると角の丸い隅丸方形のものが多くようです。堅穴の大きさはおおよそ長さ8m、4～5m、長さ3mの「大・中・小」の3種類があります。住居の間取りは、入り口を入れて中央より奥寄りに炉、周囲に4本の柱、出入り口には梯子、貯蔵穴があるものが多いようです。住居の中には、数軒の焼失家屋が含まれています。これは、何らかの理由で火災にあった住居の跡で、燃え残って炭化した建築部材が、住居跡の床面から出土しました。このような痕跡から弥生人のすまいの構造についてわかることは大きいでしょう。



炉は、図のようにして台付甕などをかけました。



菊川式土器



吉ヶ谷式土器

弥生時代の落合遺跡

1884年、文京区弥生町の東京大学農学部で発見された土器は、やがて、弥生式土器（現在では弥生土器とよんでいます）と名づけられました。そして、弥生土器はコメ作りや金属器の使用と関係することがわかりました。これらの新たな技術は、まず、九州地方の北部に伝えられ、その後急速に列島各地へ広がったと考えられています。従来は、弥生時代は紀元前300年頃から紀元250年頃までの間と考えられていました。最近では、国立歴史民俗博物館などは、AMS（加速器質量分析法）という新しい方法による分析と土器に対する新たな見方によって、弥生時代のはじまりをこれまでの年代よりも500年ほど遡らせて考えているようです。

東日本のひとびとの間には縄文時代の文化的な伝統が強くのこっていたためか、弥生文化の普及は、西日本より遅い弥生時代の中期のころとなりました。このころ、東海地方から海の道をつたってやってきた人々が、海の近くの港区・伊皿子貝塚や荒川などの比較的大きな河川の流域にその足跡をのこしています。神田川沿いの地域にも、このころから人々が暮らした跡がみつかりますが、それは本格的な集落ではなく、土器の破片がみつかる程度のものです。

それが、弥生時代も後期に入ると、妙正寺川・神田川流域にも多くの集落が営まれるようになりました。後期前半には下流域の下戸塚遺跡に環濠集落が出現します。しかし、未だ下戸塚遺跡より上流の地域には集落は本格的には広がっていません。弥生時代後期後半、下戸塚遺跡の環濠内から、その外側に住居が広がるようになると、落合遺跡を含む神田川の中流域にも新たな集落が出現してきます。例をあげれば、都内でも最大級の方形周溝墓をもつ西早稲田三丁目遺跡、小銅鐸が出土した高田馬場三丁目遺跡などで、さらに上流域には数百軒の大集落である中野区新井三丁目遺跡などがあります。

落合遺跡にみる弥生時代後期を中心とする集落は、こうした流れの中で誕生したのです。

東海系の土器

ところで、用途による違いとは別に、弥生土器には地域色が現れたのがみられます。その土地の土器を「在来系の土器」、他地域の土器作りの技術を引くものを「外来系の土器」と呼んでいます。「外来系の土器」といっても、すべてが他地域で作られたわけではなく、他地域の土器をまねてその土地で作った土器もあります。こうした違いは土器をじっくり観察することでわかります。落合遺跡では、このうち東海地方・静岡県の天竜川流域に分布する「菊川式土器」の影響を受けたものもみつがっています。

吉ヶ谷式土器

北関東東地方を中心に広がる「吉ヶ谷式土器」もみつがっています。「吉ヶ谷式土器」は、縄文を施すことなくなった弥生土器の中にあって、口縁部に胴部に荒い縄文が施されることが大きな特徴です。目白学園遺跡で発見された「吉ヶ谷式土器」は、口縁部に4段の輪積みの痕を残し、その上に荒い縄文が施された壺形土器です。

東海地方や北関東東地方の影響を受けた土器が出土することは、この地域に他の地域のひとびとが直接やってきた、あるいは他地域のものがやってきた、またあるいは他地域のものをまねてものを作ったなどここに暮らしの人々が決して孤立した存在ではなく、広く他の地域との交流をもっていたことを示しているのです。



奈良時代の食器と落合式土器

奈良時代は、710年の奈良の平城京への遷都にはじまり794年に京都の平安京に都が移されるまでをいいます。このころ、落合遺跡のあたりは武蔵国に含まれていました。武蔵国には武蔵国府を中心に21郡がおかれ、落合遺跡は豊島郡と多摩郡、荏原郡の境あたりに相当します。8世紀は、いわゆる律令時代といわれる中央集権国家が建設されました。そのため、畿内から遠く離れた武蔵国でも、地方色豊かな鬼高式土器から、律令的土器様式といわれる官都の食器様式を模倣して各地方の食器様式が成立するようになります。その一つとして、新宿区の落合地区では、落合式土器が出現するようです。



土師器焼成遺構（第12次調査・1号土坑）

奈良時代の武蔵国では、荒川から北側では北武蔵型、多摩川から南側では南武蔵型、そして妙正寺川・神田川と地域ごとに特色ある土師器が生産されていました。

目白学園遺跡は、落合型坏に代表される落合式土器の生産拠点のようで、土師器の焼成遺構が確認されています。落合遺跡の土師器焼成遺構は、2～3mくらいでいちじくのような形をしています。発掘調査による所見から、覆い焼きとよばれる方法で焼かれたと考えられます。覆い焼きは、須恵器や陶磁器の窯と同じように天井による熱の照り返し効果を利用して、長時間にわたって高温を持続させます。これは熱斑を少なくした焼き方であり、縄文土器や弥生土器と比較して、きわめて熱効率のよい焼き方です。その手順は、地面を掘りこんだ穴の中に整形乾燥を終えた土師器を並べ、その上に薪や藁によって天井の骨組みを作り、すき間を灰や泥でふさいで密閉して火を入れたと考えられます。灰や炭、焼けた土が残されていることが多いのは、多量の藁や薪を燃料として土師器が焼かれるためでしょう。

上の写真は土器の覆い焼きの焼成実験の際に撮影したものです。



8世紀の武蔵国における坏形土器の様相



住居跡とカマド

落合遺跡で発見された奈良時代の住居跡は、堅穴住居が基本で平地式あるいは高床式の住居・建物は確認されていません。堅穴を上から見ると方形をしています。縄文時代や弥生時代の住居跡と大きく異なるのは、カマドが作られるようになったことです。カマドは、住居の奥壁の中央に作りつけています。炉に比べると熱効率がよく、少ない薪の消費で炊飯・調理ができるようになりました。カマドからは、煮炊きや湯沸しのための長胴甕、それをささえた支脚などがみつがっています。長胴甕と甕がセットとなることから、このころの食生活は米飯については蒸した飯であったと推定されます。落合遺跡のカマドは、袖両脇に土師器長胴甕の口を下にして逆さに立て、上に長胴甕を連結して骨組みをつくり、粘土と砂を練りこめてつくっています。

目白学園出土品資料室には、カマドの復元模型があります。

奈良時代